

キルケゴールとコミュニケーションの問題再考

谷塚巖

1. はじめに

本稿では、キルケゴールが「コミュニケーション」にかかわる問題をどのように考えていたのかについて再考する。この問題を検討するにあたって参照すべきキルケゴールのテキストは、著作や遺稿など多岐にわたるが、特に次の諸著作は重要であろう。すなわち、遺稿『倫理的および倫理的-宗教的伝達の弁証法』(1847-48)——以下、『伝達の弁証法』と略記——、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』(1846)——以下、『あとがき』と略記——、『私の著述活動について』(1851)、そして、キルケゴールの死後に出版された『私の著述活動への視点』(1859)である。これらのうち、とりわけ注目されるのは、「伝達」という言葉がタイトルにも現れている『倫理的および倫理的-宗教的伝達の弁証法』であろう。本稿では、このテキストを手がかりにして検討を進めていく。

キルケゴールと「コミュニケーション」という問題は、キルケゴール研究において常に取り上げられてきたテーマである。研究史を見渡しても、「コミュニケーション」ということが、キルケゴールの思想を理解する上で、重要な位置を占めていることがわかる。古典的研究として挙げられるのは、ラース・バイヤホルムの『伝達の弁証法』¹であろう。日本でも、大谷長の『キルケゴールにおける授受の弁証法』²において、早くからキルケゴールとコミュニケーションの問題が注目されていた。近年では、ロジャー・プールが、『キルケゴール-間接的伝達』³でこの問題に注目しており、また最近でも、フィリップ・シュヴァープが、『方法の反動-キルケゴールと間接的伝達』⁴で、この問題に取り組んでいる。このように、コミュニケーションの問題は、これまでのキルケゴール研究においても共有されてきた重要なテーマなのである。

以下では、まず、2において遺稿が執筆された背景について確認し、続いて3で、コミュニケーションについてこの遺稿で何が述べられているのかについて検討する。そして最後に4で、明らかになった点をまとめ、今後の展望を示すことにする。

2. 『伝達の弁証法』の成立背景とその意義

まず、このテキストがどのような経緯で成立することになったのかについて見てみよう。キルケゴールは、1847年4月から5月にかけて、いくつかの講義をする計画を立てている⁵。

私が今したいと考えているのは、伝達の弁証法に関する、12回の講義からなる小さな科目を持つことである。その上で、恋愛、友愛、そして愛に関する、12回の講義も。(NB: 192, *SKS* 20, 115)

キルケゴールは、1843年2月の『あれか・これか』の出版をもって、著述家としての活動を公的に開始するが、その著述活動は、1846年2月に出版の『あとがき』で一応の終結をみることになる⁶。実際には、その後も著述活動は続けられたのであるが、キルケゴールは、一連の著述活動を終えてから、「伝達の弁証法」や「愛」をテーマにした講義を計画する考えを抱いていたことになる。このことは、これらのテーマが、キルケゴールにとって、同時代に対して明らかにすべき次の課題として重要な位置を占めていたことを示している。

ではなぜ、従来のように、著述ではなく講義を選んだのであろうか。キルケゴールは、コペンハーゲン大学で哲学の修士号を得ていたことから、哲学部で授業をする権利を与えられていた⁷。キルケゴールはこれを一つの機会とみて、講義によってそれまでの著述活動を下支えし、その中で展開された理念をより多くの門戸に開きたいと考えていたのである⁸。つまり、講義を、著述活動の成果をより多くの人々と共有するための機会と見ていたようである。しかし、結局、1847年5月から6月にかけて書かれた日誌に記しているように、この計画は途中で断念される。

最近、私は、日誌 NB の 251 頁にしたがって、倫理的および倫理的-宗教的伝達の弁証法に関するいくつかの講義の準備にとりかかった。しかし、私は、講義を持つのにふさわしくないということを確信してしまった。私は、ある特定のことで仕事をするに甘やかされたのだ。私の文体がもつ、そして私の産み出

すものがもつ、植物的な多産性、すなわち、それぞれの行文の中に徹底的に反省されているものは、私にとって、あまりにも本質的なものだ。もし講義を持つことになれば、私はそれらすべてを別のものとして・・・準備するべく見直さなければならなくなる。それは面倒だ。また別の意味でも、私は自分自身に満足できない。(NB2: 13, *SKS* 20, 142-143)

こうして草稿の形で残されたままになったのが、キルケゴール自身によって命名された『倫理的および倫理的-宗教的伝達の弁証法』である。この遺稿は、全体で 49 片の断片から構成されており、批評版『全集』では、Papir 364 から Papir 371 までの整理番号で分類されている⁹。キルケゴールがこのテーマについて講義をする計画まで立てていたことや、すでに着手された原稿の分量を考え合わせると、伝達するということをめぐる問題が、キルケゴールにとって重要な位置を占めていたことが窺えるだろう。この問題は、キルケゴールに、その理論的な反省を要求するまでに本質的であったとすることができる。では、キルケゴールは、この問題をどのように捉え直そうとしていたのだろうか。

3. 遺稿における「コミュニケーション」の問題

3-1. 「倫理的伝達」

キルケゴールが「コミュニケーション」を問題にするのは、同時代への批判からである。まずこのことから見てみよう。

混乱していること、それは、学問として伝えられるべきものが、芸術として伝えられる場合であるが(・・・)、同様に、芸術として伝えられるべきものが、学問として伝えられる場合もそうである。そして、現代における混乱は、ここに、すなわち、倫理的なものが、学問として伝えられている、というところにある。

(Papir 365: 5, *SKS* 27, 392)

ここで「芸術」(*Kunst*)と訳したデンマーク語は、現代のわれわれにとっては、美術的な意味で解される語であろう。しかし、キルケゴールは、この語について、「美術に関して美的に理解するだけになっている」¹⁰と述べており、この語をそのような狭い意味で捉

えることに批判的である。キルケゴールと同時代の辞書を見ても、「自然」の対義語として、人間の活動を意味する語として説明されており、必ずしも美術のみを指す語に限定されていたわけではない¹¹。したがって、本稿では、「芸術」を美術的な意味に狭めてではなく、より広く、人間の創造的行為一般にまで拡張させて解することにしたい。

キルケゴールがこの語をどのような意味で用いようとしていたのかについては、もちろん更に検討することが必要であるが、ここではさしあたり、キルケゴールが「時代の混乱」として見て取っていた内容が何であったのかを確認するにとどめておきたい。重要なのは、「倫理的なもの」が、それに不適切な形式で、つまり「学問」として、伝達の対象になっている、ということである。このことは、「コミュニケーション」の「内容」だけでなく、その「形式」にも注意が払われていたことを示しているだろう。

では、遺稿では、これらの点について、どのような議論が行なわれているのだろうか。キルケゴールが計画した講義の草案は、第一案から第三案まで存在するが¹²、それぞれの案を辿ると、最初のアウトライン的なメモの段階から、第二案における論点の細分化をへて、第三案では、まとまった形で叙述が展開されていることが確認できる。本稿では、これらの案から、キルケゴールが問題にしようとしている「コミュニケーション」にかかわる箇所を中心にして取り上げることにしたい。

キルケゴールは、コミュニケーションの問題を検討するにあたって、まず、それを三つの大きな区分に分類している¹³。すなわち、「伝達者」、「受容者」、そして「対象」である¹⁴。以下、それぞれについて見ていくことにする。

まず最初に注目されるのは、「受容者」の理解である。キルケゴールは、この語を、受動的な意味ではなく、能動的な意味で捉えるべきだと考えている。「受容者」は、一つの能動語である。ゆえに、われわれはいかなる受動語も持たない¹⁵。すなわち、「受容者」は、何らかの能動的な行為をなすものとして理解されている、ということである。

「受容者」と同様に、「対象」をめぐる考察にも特筆すべきものがある。これは、キルケゴールに特徴的ないわゆる弁証法的な思考法からきている。キルケゴールは、「伝達する」ということを問題にするために、まず「知識」の問題を取り上げる。「知識」の受け渡しがなされるとき、伝達ということが成立する。では、このことを否定の側から考えてみるとどうなるだろうか。つまり、受け渡されるものが何もないときの場合はどうなるだろうか。このとき、伝達と言われるものは、何ら成立しないことになる。

キルケゴールが問い始めるのは、まさにこの点からである。受け渡されるものがないと想定される状況は、次のように設定される。ある人が、自分のなすべきことが何であるのかを知っている場合、そのことについての「知識」は、すでにその人のなかに存在している。そしてそれが、すでにその人によって所有されているのであれば、伝達の「対象」として受け渡されるべきものは厳密には何も存在しないことになる¹⁶。自分のなすべきことを知るということは、一方では「自己認識」にかかわる問題でもある。そこで、「自己認識」も「知識」の「対象」に含まれる一つとみなされる¹⁷。さて、「対象」が存在しないとき、あるいは、「自己認識」ということが問題であるとき、それでも「伝達」ということが言われなければならないとしたら、そこで生じるのはどういう事態だろうか。

キルケゴールは、このように否定の側から問うことによって、コミュニケーションを考察し直すことを試みるのである。

さて、われわれは、徹底的に知識として伝達の弁証法を考えてきた。そして、それが廃棄されるということについて見た。いまや、伝達についての新しい概念が導かれる。(Papir 365: 9, *SKS* 27, 395)

ここで言われている「新しい概念」は、「学問として何かを伝えること」と、「芸術として何かを伝えること」との間の区別を前提にしている¹⁸。キルケゴールが問題にしたいのは、後者の伝達にほかならない。では、「芸術として何かを伝える」この伝達において問題になるのは、どういうことだろうか。

キルケゴールは、これに相当するものとして「現実化」ということを考えている。

倫理的なものは、芸術として伝えられるべきである。あらゆる者がまさにそれを知っているがゆえに。伝達の対象は、それゆえに、知識ではなく、現実化¹⁹である。(Papir 365: 10, *SKS* 27, 395)

では、この「現実化」とは、どういうことだろうか。少なくとも、これまでの考察を通してわかることは、それが「受容者」においてなされる行為に関係している、ということだろう。また、ここでは、伝達される「対象」が、客観的に認識される事柄の問題ではない

ことも示されている。「対象」が「知識」として問題になるのではなく、「受容者」においてなされる何らかの「能動的行為」に、焦点が移されているからである。

「伝達の弁証法」がこのように展開されてくると、キルケゴールが、必ずしも、コミュニケーションだけを問題にしているわけではないことがはっきりしてくる。キルケゴールにとっては、何よりもまず「倫理的なもの」が問題であって、それが他方で、コミュニケーションのあり方そのものと、分かちがたく結びついていることが、全体として問題になっているからである。そして、ここでは、「現実化」ということに主題が移されている。重要なのは、この「現実化」が、「受容者」の「受容性」ではなく、「能動性」にかけられているということであろう。

それでは、伝達における他の要素、「伝達者」はどのように考察されているだろうか。前述の「伝達についての新しい概念」を導くにあたって、キルケゴールは、「伝達者」というもともとの概念が廃棄されることを見ていた²⁰。伝達されるべきものが、「受容者」がすでに所有しているものであって、ただその「現実化」をまつだけということが問題であるとき、「伝達者」は、「受容者」において所有されているものにかぎって、「伝える」という役割を果たしえないことになる。問題になっているのは、伝達されるのが「対象」ではなく、「現実化」という一つの事態・成り行き、ということである。伝達の目的は、この「現実化」をいかに実現するかということに移っている。こうして、キルケゴールは「伝達者」という概念を仮定しつつそれを否定するのであるが、同時に、この理論的操作によって、別の伝達のあり方を指し示そうとしているのである。

こうして、「芸術の伝達」という新しい考え方が導入される²¹。「倫理的なもの」は、まさにこの伝達の形式を要求する、ということがキルケゴールのさしあたっての答えであるが、キルケゴールはこの伝達をさらに三つの論点に細分化して考えようとしている。すなわち、「間接的伝達」、「二重-反省」、そして「産婆的なもの」である²²。以下では、このうちの「間接的伝達」に着目する。

遺稿では、「間接的伝達」というタイトルの下で、次のようなことが考察されている。

（対象は、すでに示されたように、知識ではなく、芸術、現実化である。）

伝達者は、あえて、いつもただ間接的に働きかけるようにだけする。1) なぜなら、彼は自分が教師ではなく、弟子であって、反対に、神が、彼やあらゆる者の教師の中の教師である、というように表現すべきだから。2) なぜなら、彼は、

受容者自身もまさにそのことがわかっている、というように表現すべきだから。

3) なぜなら、倫理的には、課題はまさにこのことに、すなわち、どの人間も神との関係に一人で立たなければならなくなる、ということにあるから。

受容者は、こうして、決して弟子となることができない。というのは、彼はそのことをわかっているから。また、追従者となることもできない。というのは、このことは、倫理的に忌まわしいことだから。(Papir 365: 13, *SKS* 27, 396-397)

この考察においてまず注目されるのは、「伝達者」の役割であろう。キルケゴールは、それを、直接的ではない仕方で働きかける、ということに見いだしている。そしてこのことを、教師と弟子との関係の一つのたとえにとって、それから区別される「伝達者」と「受容者」との関係から考察している。このように区別されるのは、「倫理的なもの」が問題となっているこの新しい伝達において、「伝達者」は「受容者」に対して、教師と弟子との間にあるような関係には立たないことを示すためである。この伝達において、「伝達者」は、「受容者」の「教師」とはならない。また、「受容者」は「伝達者」の「弟子」、あるいは「追従者」とはならない。つまり、「伝達者」と「受容者」との関係は、教師と弟子との関係とは一致しない。「伝達者」と「受容者」は、教師と弟子との関係にあるのではない、ということがまず明確にされるが、そのようにして、両者は、直接的な関係はないということが示されるのである。

次に注目されるのは、教師と弟子との関係がたとえとして用いられている点であろう。この関係が、前述のような「伝達者」と「受容者」との関係と必ずしも重ならないのであれば、このたとえは、一見すると無益なように思われる。しかし、1) の理由でも明らかのように、教師と弟子との関係のたとえは、「伝達者」の地位を確定するのに役立っている。なぜなら、「伝達者」は「弟子」とされているからである。「倫理的なもの」が問題になる伝達において、「伝達者」は、あくまでも、教師と弟子との関係で理解される「弟子」の立場に置かれている。では「受容者」についてはどうであろうか。「受容者」は「弟子」ではないとされているが、この場合、「受容者」は「伝達者」に対してそうではないということである。「伝達者」が「受容者」に対して「教師」とならないのであれば当然そうであろう。こうして、「伝達者」と「受容者」は、教師と弟子との関係における「弟子」という地位において一致しうることが示唆されるのである。

こうして問われることになるのは、「弟子」に対する「教師」であるが、上の引用からこの「教師」が誰であるかは明らかであろう。それは、「神」にほかならない。こうして、人間の神に対する関係が、弟子の教師に対する直接的な関係にたとえられるのである。

以上の議論をまとめると、「倫理的なもの」が問題となる伝達においては、「現実化」ということが問題になること、そして、「伝達者」と「受容者」との関係が二重に捉えられる、ということになるだろう。「伝達者」と「受容者」との第一の関係は、神と人間との関係であり、この関係は、教師と弟子との直接的な関係にたとえられる。つまり、神が教師であり、人間は、その教えを受ける弟子である²³。この関係において、人間は、そのあらゆる瞬間に「倫理的なもの」を「現実化」することが要請されている²⁴。「伝達者」と「受容者」との第二の関係は、人間と人間との関係であり、この関係においては、「伝達者」も「受容者」も共に、教師と弟子との関係でたとえられる弟子である。弟子は、第一の関係で明らかになったように、教師に対して直接課題を担っているのであるから、この第二の関係においては、「伝達者」でさえも「受容者」と同じことをなすことが要求されている。したがって、両者の関係は、厳密には伝達の関係にはないことになる。つまり、「現実化」ということにかぎって、相互には関係しない。この第二の関係が、「非直接的」、あるいは「間接的」と呼ばれるのは、この非関係的な関係のためである。

以上が、「倫理的伝達」ということでキルケゴールが論じている概要であるが、しかし、不明瞭な点もいくつか浮かび上がってくる。まず、明らかなように、「倫理的伝達」においては、「神関係」ということも同時に問題になっているが、このことは、「倫理的なもの」をすでに超えてしまっているのではないだろうか。これはどう説明されるのだろうか。また、「芸術の伝達」と言われるとき、その対象である「現実化」とは、厳密にはどういうことなのだろうか。もちろん、それが「能動的行為」や、「神との関係に一人で立つ」ことを含意していることは以上からもわかるが²⁵、このことだけでは不明瞭である。さらに、前述の第二の関係において、「伝達者」は「受容者」に対して、間接的作用を及ぼすことができるだけである、ということが明らかになったが、では、そうした作用はどのようにして可能になるのだろうか。そして、この第二の関係で言われている「伝達者」に、キルケゴール自身も、すなわち「著述家」ということも想定されているのだろうか。こうしたさまざまな疑問が浮かび上がってくるが、本稿では、特に最初の疑問点を解明することに努めたい。

3-2. 「倫理的-宗教的伝達」

「倫理的なもの」が伝達において問題になるとき、キルケゴールは、「倫理的なもの」がすでに人間に内在しているという立場から検討を行なっている²⁶。つまり、「倫理的なもの」を前提にした上で、それがコミュニケーションにおいてどのような事態を生じさせているのかという問いから考察を行なっている。キルケゴールにとって、「倫理的なもの」は、「知識」ではないがゆえに²⁷、あたかもそのようなものとして伝達されていることがそもそも問題であった。しかし、「宗教的なもの」については、そのような立場は取らない。

倫理的なもの、および倫理的-宗教的なものに対する関係における、教育²⁸の相違は、ただこのこと、すなわち、倫理的なものは、それ自身において、普遍-人間的なものであるが、宗教的な（キリスト教的な）教育は、最初に、知識を伝えなければならない、ということである。倫理的に、人間は、それ自身において、倫理的なものについて知っているが、しかし、キリスト教的に、人間は、それ自身において、宗教的なものについて知っているわけではない。ここでは、最初に、わずかばかりの知識の伝達がなければならない。——しかし、こうして再び、倫理的なものにおけるのと同じ状況がはじまる。(Papir 366: 3, *SKS* 27, 402)

引用からも明らかなようにキルケゴールは、人間に普遍的に内在しているものと、そうでないものとを区別し、人間に内在していないものにかぎって、すなわち「宗教的なもの」にかぎって、「知識」の伝達が必要でないと考えている。遺稿では、「宗教的なもの」が具体的に何なのかについては説明されていないが、キルケゴールの著作の二重性ということから考えれば、それが、いわゆる「宗教的著作」に相当するものであることは明らかだろう。キルケゴールの「宗教的著作」は、新約聖書にもとづく宗教講話という文体によって構成されていることから、それは、厳密には、聖書の言葉として捉えるべきかもしれない。いずれにしても、「宗教的なもの」にかぎって、「知識」の伝達が必要でないとということが考えられている。

キルケゴールは、「知識」の伝達は、すべて「直接的伝達」であるということを述べている²⁹。つまり、人間に内在していないものは、直接的に「知識」として伝えられなければ

ばならない、ということである。しかし、この形式による伝達こそが、同時代の混乱を招いている原因ではなかったのだろうか。たしかに、新しい伝達概念が必要とされたのは、まさにこのことのゆえだったわけであるが、一方で、キルケゴールは、伝達の「対象」となるものが「知識」ではなく、したがって「対象」そのものがない、いわば新しい伝達概念の導出を試みていた。したがって、「知識」の伝達そのものが否定されていたわけではない。「知識」は、「宗教的なもの」の伝達には不可欠の契機として考えられていたのである。こうして、キルケゴールは「倫理的なもの」と「宗教的なもの」とをハイフンでつないだ「倫理的-宗教的伝達」というものを提示するのである。

倫理的伝達が、また、その始まりとして、それ自体において知識の契機をもつとき、われわれは倫理的-宗教的、とりわけ、キリスト教的伝達というものをもつ。この知識の契機によって、それは、厳密な意味における倫理的伝達から切り離されるが、しかし、それはもっぱら、知識の伝達のもとにではなく、なしうるの伝達³⁰のもとに、より詳細には、なすべし-なしうるの伝達³¹のもとに分類される。伝達は、知識の方向にではなく、なしうるの方向に向いている。伝達される知識は、この伝達においては暫定的なものである³²。(Papir 371:2, *SKS* 27, 434)

こうして、「知識」を、あくまでも「暫定的なもの」として組み入れた二重の伝達として、「倫理的-宗教的伝達」が考えられていることが明らかとなった。重要なのは、この伝達こそが、キリスト教的伝達として考えられている、ということである。そして、キルケゴールが問題にする「知識」は、この伝達においては、キリスト教についての「知識」のことにのみであって、それ以外ではない、ということにも留意すべきだろう³³。

このように見てくると、この伝達における主要な問題は、「暫定的なもの」としてのキリスト教の「知識」ではなく、キルケゴールが「倫理的伝達」において取り上げていたものと同様のもの、ということがわかる。これまでの議論では、それが「現実化」、あるいは「受容者」（「伝達者」も含めて）における能動的行為にかかわるものであることが示された。上の引用では、それが、さらに「なしうる」そして「なすべし-なしうる」というカント的な倫理学を連想させる枠組みで捉えられる問題であることが示されている。キルケゴールは、キリスト教的伝達の問題を、こうした実践哲学的な枠組みで捉え直すことを試みていたのである。ただし、問題は、本稿で手がかりとしてきた遺稿では、この枠組み

が提示されたままにとどまっており、理論的に深められた議論は見られない、ということである³⁴。キルケゴールは、結局、この講義の計画自体を断念してしまい、それ以降は、『愛のわざ』の著述に専念することになるからである³⁵。

しかし、以上の議論から、一つの重要な論点を取り出すことができる。それは、こうして新たに構成し直された伝達概念が、キルケゴールの著述活動そのものを指し示している、ということである。実際に、キルケゴールは、講義の第二講として計画された議論の中で、自身の著述活動との関係を、次のように言い表している。

特に、倫理的な真理-伝達との関係で、また、部分的には倫理的-宗教的な真理-伝達との関係で、間接的伝達は、最も厳密な形式である。しかしながら、その側面にそってなされる直接的伝達も、同時に、それ自体が、別の意味で支えられているものを支えるために必要である。このことを、私は、私の著述家-活動の、まさに、始めから理解していたのである。それだから、仮名たちと共に、いつも建徳的講話という形における直接的伝達が続いたのであり、この数年、私は、ほとんど唯一、直接的伝達を用いてきたのである。(Papir 371: 1, *SKS* 27, 429)

なお、ここでは、「倫理的伝達」あるいは「倫理的-宗教的伝達」が、「真理」の伝達にかかわるものとして捉え直されている。とすると、新たな論点として問われるべきことが、「真理認識」の問題、さらには、キルケゴールがこの「認識」ということをどのように考えていたのか、ということになる。しかし、注意が必要なのは、この問題も、キルケゴールが提示した先の枠組みと同様に、遺稿では十分に深められていないということである³⁶。ここでは、「伝達」ということで分類されていた「受容者」がまさに問題になるが、キルケゴールの考察が、主に「伝達すること」、あるいは「伝達者」に比重が置かれていたことは、これまでの議論からも明らかであろう。

「受容者」の問題は残されたにせよ、「倫理的伝達」や「倫理的-宗教的伝達」として考えられたものが、キルケゴールの著述活動そのものにあてはまるという点は重要である。というのは、ここから、キルケゴールが、どのようなコミュニケーションのあり方を探ろうとしていたのかが明らかになるからである。引用では、「間接的伝達」「直接的伝達」という言い方がなされているが、これらは、それぞれ「倫理的伝達」「宗教的伝達」を言い換えたものにほかならない³⁷。キルケゴールは、これら二つの伝達からなる相関的な形式

こそが、キリスト教的伝達に妥当すると考えたのであるが、その伝達を、著述家という立場で、実際に著述するということを通して試みたのである。そして、ここに、キルケゴールが探ろうとしていたコミュニケーションのあり方を認めることができるだろう。キルケゴールにとって、コミュニケーションの問題は、同時代のキリスト教が抱えていた問題そのものであり、著述活動は、まさにその克服に向けられていたのである。

4. むすび

さて、以上を通して、キルケゴールがコミュニケーションにかかわる問題をどのように考えていたのかについて見てきた。まず、キルケゴールが問題提起したのは、同時代において、「倫理的伝達」ということが、それにふさわしくない形式、つまり「知識」の伝達と取り違えられている、ということであった。そして、「倫理的伝達」ということで問われるべきは、「芸術の伝達」であって、それは「現実化」、あるいは「受容者」の「能動的行為」にかかわるものである、ということが明らかにされた。キルケゴールは、この伝達においては、「伝達者」でさえも「受容者」と同じ立場にあるということから、この伝達は、どこまでも「間接的に」なされなければならないと考え、ここに「知識」の伝達との決定的な相違を見たのである。

しかし、キルケゴールが問題にしたかったのは、「神の前に一人で立つ」という、すべての人にかけている根本的な要請であった。つまり、ここには、すでに「宗教」という契機が入り込んでいるのであって、この契機については、あらかじめ、どこからか与えられていなければならない。それは、「倫理的なもの」とは違って、人間に内在していないのであるから、ここにかぎって、「知識」の伝達、つまり「直接的伝達」が必要になる。こうして「間接的-直接的伝達」、あるいは「倫理的-宗教的伝達」という概念が提示されるにいたったわけである。そして、この伝達こそが、キルケゴールが、同時代において最もふさわしい形式として提示しようとしたキリスト教的伝達なのである³⁸。

本稿では、さらに、キルケゴールのこうした特異な伝達概念が、著述活動そのものを指し示している、ということも確認された。そして、このことから、少なくとも「伝達者」としての立場からこうした考察が行なわれている、ということが明らかにされた。キルケゴールは、「著述家」、すなわち「伝達者」として伝達の問題について考えていたことになるからである。

しかし同時に、ここには、残された問題も存在することが明らかとなった。すなわち、「受容者」にかかわる問題である。以下では、最後に、この点についての展望を示すことによって、本稿を締めくくりにしたい。

たびたび触れられてきたように、『伝達の弁証法』において十分に深められていない議論は、「芸術の伝達」ということで最初に問題にされた「受容者」にかかわるものである。ここでは、伝達の「対象」が、もはや対象とは言われえないものに、すなわち「現実化」や「なしうる」という、「受容者」における能動的、あるいは実践的な行為にかかわるものになることが示された。キルケゴールはこれを「芸術の伝達」と呼ぶのであるが、キルケゴール自身は、この伝達を試みるにあたって、「伝達者」として、まさに「著作物」をもってなしたのである。

ここで、再び、「芸術」という語をどのように解するかが重要な論点となってくるものと思われる。最初に確認されたように、この語をより広く「創造的行為」と解するなら、この伝達は、二つの対に分けて見ることが可能になる。つまり、一方における、著者と著作物という対、そして他方における、著作物と読者という対である。こうして、「芸術の伝達」は、「著作物」を介した伝達として捉えることができることになる。

ここから、「受容者」にかかわる問題を、「読者」の問題としてさらに展開する可能性が開かれてくる。すなわち、「受容者」の問題は、「受容者」である「読者」が「著作物」を読む、という読解行為の問題として捉え直すことができる、ということである。キルケゴール自身は、この問題に、自らのものにするという意味における「自己化」という概念をもって取り組んでいるのであるが³⁹、こうした問題については、読者論として改めて取り上げることに意義があるだろう。

読者論への接続を試みるに際して、ここであらかじめその見通しを述べておくなら、理論的には、まず、ヴォルフガング・イーザーの「読解の現象学」が参照できる⁴⁰。イーザーは『読書行為』において、文学作品を読む過程で、読者の意識に何が生じているのかという問題を、現象学を手がかりに分析している。キルケゴールとの関連で注目されるのは、イーザーが、読解行為における読者への作用という問題を論じているからである⁴¹。イーザーの議論は、キルケゴールが「間接的伝達」で取り上げていた、「伝達者」と「受容者」との間の「間接的作用関係」を、「受容者」の問題として解明することを補完するものとなるだろう。

また、キルケゴールの問題を解明する理論としてさらに参照できるのは、ポール・リクールが『時間と物語』において練り上げたミメーシス概念である⁴²。リクールは、アリストテレスの『詩学』におけるミメーシス概念を「模倣的行為」、すなわち「模倣、あるいは再現する能動的行為」という意味に受け取り直して、独自のミメーシス概念を展開している。創作行為としてのミメーシスは、その受け手である「読者」の実践的な世界の「再設定」をも含めた一連の過程を包括するという議論は⁴³、キルケゴールが残した「受容者」の問題を解明するにあたってきわめて有用である。

以上を通して、ようやく、キルケゴールがコミュニケーションということで問題にしたかった全体像が見えてくるものと思われる。

-
- 1 Lars Bejerholm, “Meddelelsens Dialektik”: *Studier I Søren Kierkegaards teorier om språk, kommunikation och pseudonymitet*, Munksgaard, 1962.
 - 2 大谷長『キルケゴールにおける授受の弁証法』、東方出版、1953年。
 - 3 Roger Poole, *The Indirect Communication*, The Universtiy Press of Virginia, 1993.
 - 4 Philipp Schwab, *Der Rückstoß der Methode: Kierkegaard und die indirekte Mitteilung*, (*Kierkegaard Studies: Monograph Series 25*), Walter de Gruyter 2012.
 - 5 キルケゴールのテキストの生成史については、批評版キルケゴール全集の注釈を参照。
なお、この批評版『全集』（通称、*SKS*）および『注釈』は、オンラインで一般公開されている（<http://sks.dk/>）。本稿におけるキルケゴールからの引用は、このオンライン版による。引用箇所については、慣例にしたがって、*SKS*、巻号、頁数、の順で示し、日誌については、分類番号、*SKS*、巻号、頁数、の順で示すことにする。
 - 6 『あとがき』は、後には、著述活動の「転回点」として位置づけられることになる。
キルケゴールは、1848年夏頃に、それまでの著述活動の全体を振り返りながら、『あとがき』の特殊な位置づけについて次のように日誌に書いている。「[全] 著作の最初の部は、美的な生産性である。[全] 著作の最後の部は、唯一、宗教的な生産性である。これらの間に、転回点として『結びとしての非学問的あとがき』が存在する。この仕事は、「問題」、すなわち、著述家-活動全体の問題である、キリスト者になるこ

とにかかわっており、そのことを問題提起している。・・・」。SKS 16, 17. なお、この、キルケゴールが書き残した著述活動に関する自伝的著作は、キルケゴールの死後、兄のペーター(Peter Christian Kierkegaard: 1805-88)によって 1859 年に出版されることになった。それが、『私の著述家-活動への視点-ある直接的伝達、歴史への報告』である。キルケゴールの生前には、自身の著述活動の意図を簡潔に報告した『私の著述家-活動について』という著作が、1851 年に出版されている。ここでも、『あとがき』は「中間点」として位置づけられている。SKS 13,15.

7 この点については、注釈を参照。<http://www.sks.dk/NB2/kom.xml#k30> (2017 年 9 月アクセス)

8 NB2: 13, SKS 20, 143.

9 日本語訳では、80 頁弱の分量がある。大谷愛人、原佑(訳)『キルケゴール講話・遺稿集』、第 6 巻、理想社、1964 年、333-414 頁。

10 「芸術と学問との間の区別が忘れ去られたということ。すべてが学問となり、人は、芸術を、美術に関して美的に理解するだけになっている」。Papir 365: 5, SKS 27, 391.

11 *Dansk Ordbog indeholdende det danske Sprogs Stammeord, efter den nuværende Sprogbrug forklarede I deres forskellige Betydninger, og ved Talemaader og Exempler oplyste, Anden, forøgede og forbedrede Udgave, København, Gyldendalske Boghandling, 1859, S. 1271.*

12 第一案、第二案、第三案という分類は、大谷訳前掲書でなされているものに従った。

13 ただし、この区分は更に精緻化されて、四重化として捉えられることになる。「伝達するということを考えるとき、私は、ある四重化を考えている。すなわち、1) 対象、2) 伝達者、3) 受容者、4) 伝達、である。・・・第一区分。「対象」について考察されるとき。・・・第二区分。「伝達」について考察されるとき。第三区分。・・・伝達者、受容者について考察されるとき。・・・」。Papir 367, SKS 27, 404-406. なお、注釈によれば、キルケゴールのこの区分は、テンネマンの『哲学史』で叙述されている、古代懐疑主義の哲学者セクストス・エンペイリコスに倣ったものとされる。

<http://sks.dk/p364/kom.xml#k8130> (2018 年 3 月アクセス)

14 Papir 365: 6, SKS 27, 393.

15 Ibid.

16 「さて、われわれはある一つの実験を行なって、すべての者が知っているという特質を持つある対象、あるいはある知識が存在すると仮定してみよう。ここから、伝達における弁証法的なものにとって、何が導かれるだろうか。ここから次のことが導かれるだろう。1) 対象が消滅するという事。なぜなら、すべての者がそれを知っているなら、一人の人間が別の人間にそれを伝達することはできないから。2) そして伝達者という概念や、3) 受容者という概念が消滅するだろう。残された唯一の伝達者は、すべての人間にこの知識を伝達した者になる。そして、あらゆる者が受容者であるかぎり、受容者という概念はまさに止揚されるのである。このようにして、今や伝達の弁証法が本質的に変容される」。Papir 365: 7, *SKS* 27, 394. ここで見られるように、キルケゴールが「受容者」を受動語としてではなく能動語として捉えることができるのは、「止揚」という理論的な操作によってである。

17 「対象は、ある知識でなければならない。すべての知識は、何かについての知識であるか・・・あるいは、自己認識であるか（幻影的に、純粹自己認識や純粹自我ではなく）のどちらかである」。Papir 365: 7, *SKS* 27, 393-394.

18 Papir 365: 9, *SKS* 27, 395.

19 'en Realisation'

20 注 10 を参照。

21 「芸術の伝達という観点においては、熟達（・・・）か、あるいはまた、権威かのどちらかである」。Papir 365: 11, *SKS* 27, 396.

22 Papir 365: 12, *SKS* 27, 396.

23 「倫理的なものにおいては、神が、唯一の教師なのであって、それゆえに、このいわゆる教師の中の教師自身が、彼が教えているそのことを、訓練するのである」。Papir 365: 14, *SKS* 27, 397.

24 「倫理的なものが前提するのは、あらゆる人間は、あらゆる瞬間において、それを現実化すべき、ということである。しかし、だからこそ、彼は、それを知っていなければならない。倫理的なものは、知識に形を変えるべき無知でもってはじまるのではなく、知識でもってはじまり、現実化を要求するのである」。Papir 365: 7, *SKS* 27, 394.

-
- 25 キルケゴールは、このことに、「再生」や「新しい創造」が関係していることを示唆している。「ソクラテスが述べたのは、彼は産むことができないということ、むしろ、ただ産婆であることができるだけである、ということである。このことは、すなわち、どの人間も、倫理的なものをもっているということ、そして、人は産まれた者を、もう一度、産むことができない、ということである（ここには、キリスト教的なものが横たわっている。すなわち、再生(Gjenfødselen)、である——再生は、人間と人間との間の関係ではなく、むしろ、神と人間との間の関係であり、新しい創造のことである)」。Papir 365: 12, *SKS* 27, 396.
- 26 「倫理的なものは、個人のうちに存在するのであるから、伝達は、ここに、すなわち、倫理的なものを個人から誘うようにして引き出すことに意味がある」。Papir 365: 5, *SKS* 27, 392.
- 27 「倫理的なものは、それ自身において知識をもつ、ということが言われるべきであるかぎり、倫理的なものは「自己認識」であるが、しかしそれは、非本来的な意味における知識である」。Papir 368: 13, *SKS* 27, 414.
- 28 ‘Opdragelse’ この語について、キルケゴールは、その本来の語義「引き-上げる」(op-drage)にまで立ち返って考察を行なっている。Papir 366: 3, *SKS* 27, 402.
- 29 「すべての知識の伝達は、直接的伝達である」。Papir 367, *SKS* 27, 405; Papir 371: 2, *SKS* 27, 434.
- 30 ‘Kunnens Medd.’
- 31 ‘Skullen-Kunnen’
- 32 この「知識」が「暫定的である」ということをキルケゴールが特に強調しようとしていることは、引用された叙述の下書きと考えられる「第三章 倫理的-宗教的伝達（直接的-間接的伝達」と題された日誌記述からも窺い知ることができる。「ここでは、知識の契機があり、そのかぎりで対象がある。しかし、この契機は、ただ始めのものにすぎない。伝達は、だから、本質的には、知識の伝達ではなく、なしうるの伝達である。知識の契機が存在するということは、特に、キリスト教的なものとの関係にあてはまる。そこでは、だから、暫定的に、キリスト教についての知識が伝達されなければならない。しかし、それはただ暫定的なものにすぎない」。Papir 368: 13, *SKS* 27, 414.

33 前注を参照。

34 このことに関連して、遺稿では、わずかに次のような議論が見られるだけである。

「なしうるの伝達についての法則は、それをなすことでもってすぐに始める、ということである」。Papir 368: 2, *SKS* 27, 408.

35 「それだから、私は再度講義を断念し、途中でやめていた仕事（その第一部をすでに完成させていたのだが）、すなわち、愛のわざに取り掛かった。伝達の弁証法については、本にできるかもしれない」。NB2: 14, *SKS* 20, 143. キルケゴールのこの方針転換については注釈も参照。<http://sks.dk/p364/txt.xml>（2018年3月アクセス）

36 キルケゴールがこの問題について述べているのは、次のようなことだけである。「倫理的真理や倫理的-宗教的真理を認識することは、状況に属しているということ」。

Papir 371: 1, *SKS* 27, 422. 「倫理的真理や倫理的-宗教的真理を認識することは、認識されたものを、実存的に二重化すること」。Papir 371: 1, *SKS* 27, 423.

37 「第二章 倫理的伝達（最も厳密な意味における間接的伝達）・・・」Papir 368: 4, *SKS* 27, 409. 「直接的伝達および間接的伝達。知識の伝達はすべて直接的伝達である。なしうるの伝達は、多かれ少なかれ、間接的伝達である。初めに、私が芸術-伝達と呼んでいるものがくる。これは間接的伝達である。もしくは少なくとも、本質的に、間接的伝達である。次に、倫理的伝達がくる。これは、無条件的に、間接的伝達である。次に、倫理的、宗教的伝達、とりわけ、キリスト教的伝達がくる。これは、直接的-間接的伝達である」。Papir 371: 2, *SKS* 27, 434.

38 なお、キルケゴールが、なぜ、この遺稿に『倫理的伝達、および倫理的-宗教的伝達の弁証法』というタイトルを選んだのかについては、何も語られていない。ただ、本稿の議論を通して、それは、キリスト教的伝達ということ、いわゆる「弁証法」という一つの論理的な思考の深化として導き出すためであったことが推測される。この点については、キルケゴールに特徴的な「弁証法的」思考法との関連からさらに検討していくことが必要だろう。

39たとえば、1846年春頃に執筆されたと考えられているある未完の書簡では、「自己化」に関連して次のように論じられている。「私の読者に要求されるのは、ですから、内面性であり、それでもって読む、ということです。もしすべての人間が、本を、一度で、一挙に読み通そうとするのであれば、私は誤解されています。一方で、ただ一人

だけでも、その人にとって本質的な内面性において、本を自分のものにするようにして読むなら、彼がその本を産み出すことになるのですから、私がそれを書いたということは、結局は、偶然的なこととなります。もしそうであるなら、私は理解されており、満足です。そのとき、これらの思想は、私を熱中させるのとちょうどまったく同様に、彼を熱中させることになるでしょう」。 *Søren Kierkegaards Papirer*, udg. Af P.A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, bd. VII¹, B86, S. 281.

- 40 イーザーについては主に次の文献を参照。Wolfgang Iser, *Der Akt des Lesens: Theorie ästhetischer Wirkung*, Wilhelm Fink, 2 durchgesehene und verbesserte Auflage, 1984; Robert C. Holub, *Reception Theory: A Critical Introduction*, Routledge, 1984, pp. 82-106
- 41 特に注目されるのは、「テキストの空所」という議論である。イーザーは、テキストにおける「空所（不確定性）」こそが、テキストと読者との相互作用を可能にする条件である論じる。「空所」は、読者が読解を進めていく中で埋められてゆく。イーザーは、テキストをさまざまな組み合わせからなる一つの体系とみなすが、もしそうであるなら、テキストは読者のためにその組み合わせを実現するための場をもつはずだと述べる(266)。そのような場は、「空所」によって与えられるのであるが、「空所」は、空けておかれたある特定の場として、テキストの中に飛び地を画定し、読者による専有にその場を明け渡す(266)。つまり、「空所」とは、読者がそこにおいて働きかけられることを可能にする作用の場であって、そこにおいて、読者が想像力を働かせながら自らイメージ形成し、テキストの意味を構成していくことができる。
- 42 リクールについては主に次の文献を参照。Paul Ricoeur, *Time and Narrative*, tr. by Kathleen Blamey & David Pellauer, The University of Chicago Press, 1988, vol. 1, pp. 31-87, vol. 3, pp. 157-179. 芦名定道「キリスト教信仰と宗教言語」『哲学研究 第五六八号』、1999年、44-76頁。杉村晴彦『ポール・リクールの思想—意味の探求』、創文社、1998年。
- 43 ミメーシス概念は、創作行為としてのミメーシスを媒介項とする、詩的創作の一方の側面と、他方の側面を捉える。リクールによれば、模倣的行為としてのミメーシスは、「創作テキスト(poetic text)の力動性だけでは、その意図された終局に達しない(vol. 1, 46)。「それは、観客、あるいは読者をも要求する」(ibid)。「こうして創作された構

成物の別の側面が存在することになる」(ibid)。リクールはこの側面をミメーシス III と名付けて、テキストの前段階であるミメーシス I と、テキストそのものとしてのミメーシス II から区別する。